

松 山 大 学 論 集
第 21 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 0 9 年 8 月 発 行

英米文学鳥類考：クロウタドリについて

榊 田 隆 宏

英米文学鳥類考：クロウタドリについて

榊 田 隆 宏

1

我が国には生息していないが、英・米にはブラックバード (blackbird) という名の野鳥が居る。文字通りの意味は「黒鳥」である。とはいえ、名前は同じでも、両国の「黒鳥」は全く別種である。ちなみに英和辞書で blackbird を見てみると、「【鳥類】 クロドリくろどりの総称《雄は黒色で嘴が黄色、雌は茶色》：a クロウタドリ《ヨーロッパ産の嘴と目の縁の黄色いツグミ科の鳴鳥》。b 米国産ムクドリモドキ科ハゴロモガラス属の鳥の総称《ハゴロモガラス (redwing blackbird) など》」¹⁾とある。

つまり、ヨーロッパ産のブラックバードはツグミ科の「クロウタドリ」であるのに対して、米国産のブラックバードはムクドリモドキ科の「ハゴロモガラス」である。では、何故にアメリカ人がハゴロモガラスをブラックバードと呼ぶのか。それは、①北米にはクロウタドリが生息していない；②ハゴロモガラスが見た目にはクロウタドリと同色同大の「黒鳥」であるため、アメリカに移住した英国人たちがクロウタドリに似た黒い鳥を見つけると、故国を偲んで同じ鳥名（黒鳥）を冠したものと思われる。この点は「ロビン」にまつわる両国の逸話と同じである。

先ずヨーロッパ産のブラックバードから見てみよう。和名は「クロドリ」ではなく「クロウタドリ」である。敢えて「ウタ」（歌）の文字が挿入されているのは、この鳥が第一級の《鳴鳥》だからである。事実「ヨーロッパの三鳴鳥」と言えば、ナイチンゲール、ロビン、クロウタドリである。と見てくれば、ク

クロウタドリとは、目には「クロドリ」、耳には「ウタドリ」と言えそうである。和書と英書の専門書から具体的に見てみよう。(英文には、拙訳を記す。)

①クロウタドリ

スズメ目ヒタキ科の鳥。全長約25cm、いわゆる大型ツグミ類で、雄は全体に黒く、くちばしだけが黄色い。雌は全体に暗褐色で地味。ヨーロッパ、アジア南部、アフリカ北部に分布し、ニュージーランドには移入されたものがある。公園、農耕地、林にすみ、地上をピョンピョンはねながらミミズや昆虫を探し出して食べる。落葉をくちばしではねのけながら採食するようすは、日本のアカハラやクロツグミと同様である。木の実のある時期には、樹上でもそれらをとって食べる。3～7月ごろの繁殖期には、つがいで一定空間をテリトリーとして占有し、雄は美しい声でさえずる。木の枝のまたなどにカップ状の巣をつくり、4～5個の卵を産みこむ。抱卵は雌だけが行い、育雛は雌雄ともに行う。秋・冬季には小さな群れになることもあるが、大規模な渡りはしない。ヨーロッパではナイチンゲールとともに美しい声でさえずる鳥の代表とされている²⁾

付言すれば、クロウタドリは英国では「どこにでも見られる、ごくふつうのイギリスの鳥」³⁾で、その歌声もほぼ一年中早朝から晩まで聞かれる。そのため、英国人には身近な馴染みの鳥である。博物学者のギルバート・ホワイต์によれば、クロウタドリは「時には2月あるいは3月から、ずっと7月23日まで、秋には再び鳴く」⁴⁾ (“Sometimes in February and March, and so on to July the twenty-third: reassumes in autumn”)⁵⁾という。この点について、本邦の専門書は「イギリスを1月に訪れた際、冬季にもかかわらず本種は盛んにさえずっていた……また、ロンドンでは市内の公園、住宅地など開けた環境で見られ、かんぼく灌木の中ほどの枝先やくい杭などにとまって、夜明け前のまだ暗いうちからさえずる」⁶⁾と述べている。では次に英書の解説を見てみよう。

②The blackbird

The blackbird is an easily recognizable bird, both by sight and by ear. The male is glossy black all over, save for the orange bill and yellow eye-rim, the female dark and light brown, with dark spots on the breast. The young birds are lighter and the males do not acquire the orange beak until their second year. Some instances occur, though rarely, of pied and white birds.

It is a little larger than the song thrush, much noisier, but holding its own from the musical point of view. When alarmed, it will fly off with a shrill, complaining scream, but its normal song is most beautiful. The notes are deeper, but not as measured, or as varied and repetitive as those of the song thrush; but the rich, flute-like whistle, sometimes heard after dark, and often as early as February, is a familiar and welcome sound in woods and gardens.

The blackbird unfortunately wreaks a great deal of havoc in the garden. It eats insects and berries, raking over piles of dead leaves from them, but is inordinately fond of ripe fruit, particularly cherries and strawberries. In this respect it is far more destructive than other thrushes, and not everyone might be as patient and restrained as the essayist Addison, who wrote, 'I value my garden more for being full of blackbirds than of cherries, and very frankly give them fruit for their songs.' Most of the references to the blackbird in song, verse and nursery-rhyme are equally friendly, although the bird is not essentially a very sociable or trusting individual.

The nest is built in bushes, hedges, trees and evergreens, and is similar to those of other thrushes, being constructed of twigs, grass, straws and moss. One difference, however, is that the inner layer of mud is superimposed on an innermost lining of dried grass. It lays four or five eggs, two or three times during the season. They are bluish-green, with brown or grey spots, and sometimes unmarked.

The blackbird is a resident in Britain, but some migrate southwards, when they will congregate in large flocks. In all other respects, however, it is a strongly individual and independent bird.⁷⁾

(クロウタドリは、目でも耳でも、容易に識別できる鳥だ。雄はオレンジ色の嘴と黄色の目の縁を除けば、全身漆黑。雌は濃淡から成る褐色で、胸

には黒みがかった斑点がある。若鳥は親鳥よりは淡い色をしている。雄の嘴がオレンジ色になるのは翌年。例外種として、斑^{まだら}の白子が生まれることもある。

体はウタツグミよりは少し大きめで、声量も勝る。でも音楽的観点からは、独自のものを有する。驚いた時には、甲高くて不平を鳴らすような叫び声をあげて飛び去る。通常の歌声はこよなく美しい。声音はウタツグミよりも低くて張りがある。でも、囀りはウタツグミほど定律的でもなければ、変化にも富まず、また繰り返しも少ない。とはいえ、豊かでフルートのような歌声は、時には日が暮れてからも、また早ければ真冬の2月にも聞かれることも多く、森や庭園では聞き慣れた、歓迎される音声である。

不幸なことに、クロウタドリは庭園に大きな被害をもたらす。食餌は昆虫やイチゴ類で、落ち葉の山を嘴で撥ねのけて探す。でも大好物は熟した果実、中でもサクランボとイチゴには目がない。この点では、他のツグミ類よりは遥かに有害だ。だから皆が皆、「私が自分の庭を高く評価するのは、クロウタドリがいっぱい居るからだ。たわわに実るサクランボも、この鳴き鳥にはかなわない。美しい歌を聞かせてくれる御礼だ、遠慮なく果実を啄んでおくれ」と記した随筆家のアディソンほどには我慢強くて、節度があるとは言えないかも知れない。歌曲、詩歌、童謡の中でクロウタドリに対する言及の大半は、一様に好意的である。でも、この鳥は本来それほど人好きでもなければ、また人間を信頼する鳥でもない。

巣は藪、生け垣、樹木、常緑樹の中に作られ、他のツグミ類の巣とよく似ている。巣材は小枝、草、藁^{わら}、苔等。しかしながら一つ違う点は、最深部の乾いた草の裏地に泥の中間層が付加されていることである。1シーズンに2、3度産卵し、1腹の卵数は5、6個。卵の色は帯青緑色で、茶色か灰色の斑点があるが、時には無地のものがある。

クロウタドリは英国では留鳥だが、南方に渡るものも居る。その時には大きな群れで集まる。しかしながら、それ以外は全ての点で、単独で行動

することが多く、自立心の強い鳥である。

2

以上簡潔にまとめてみると、クロウタドリとは、①ムクドリ大の大型ツグミ類の鳥（スズメ目ヒタキ科ツグミ亜科）；②嘴と目の縁は黄色だが、それ以外は全身漆黒のクロドリ；③美声の故に「ヨーロッパ三鳴鳥」に入る別格のウタドリ；④英国では留鳥で何処にでも居る、ごく普通の鳥；⑤それ故、一般には人気のある「イギリス鳥」で、歌曲、詩歌、童謡の中では好感度も高い；⑥反面「果樹園や野菜畑を荒らすので、あまり評判が良くないという一面もある」⁹⁾となろうか。

と見てくれば、クロウタドリもまたカラスやフクロウのように吉凶あざなえる《二重人格的な鳥》であり、したがって、そのイメージ・シンボルも対照的な明と暗から成る。それを象徴しているのが、この鳥の和名である。というのも、クロウタドリとは《「クロドリ」＋「ウタドリ」》の合成語だからである。前者は「暗」に、後者は「明」に繋がる。最初に、「クロドリ」の観点から見よう。

クロウタドリについて、アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』は「悪魔、冥界の神、不運、悪、誘惑、ずるさなどを表す」⁹⁾と、またJ.C.クーパーの『世界シンボル辞典』は、「黒鳥 [ブラックバード] は（その誘うような歌と黒い羽毛から）肉の誘惑をあらわす。ヌルシアの聖ベネディクトゥスを誘惑するとき、悪魔は黒鳥として現れる」¹⁰⁾と記している。これは、勿論クロウタドリがカラスのような黒鳥であり、黒は「冥界の闇」¹¹⁾は勿論のこと、「世界創造以前の原初の暗黒、無顕現、〈無〉、悪、死の暗闇、恥、絶望、破滅、腐敗、悲しみ、悲哀」¹²⁾等を表すからである。

この陰鬱で不吉な体色の故か、クロウタドリはシェイクスピアの作品では評価は低く、しかも僅か2度しか登場しない。一つは『夏の夜の夢』、今一つは『ヘンリー四世：第二部』である。具体的に見よう。最初に、『夏の夜の夢』

の3幕1場。^{はたや}機屋のボトムは唄う。

The oussel [blackbird] cock so black of hue,

With orange-tawny bill

「色真黒でくちばしは

焦げ茶色した黒ツグミ」¹³⁾

次に、『ヘンリー四世：第二部』の3幕2場。サイレンス判事の娘は「黒ツグミ」のような「色真黒」の髪をしているが、それを嘆いて判事は同僚のシャローに次のように言う。ここでも「黒」は嫌悪の対象であるのが分かる。

Alas, a black oussel [blackbird], cousin Shallow !

「いやあ、あれは黒ツグミといった不器量な娘だ。」¹⁴⁾

この「クロドリ」という負のイメージ・シンボルの故に、クロウタドリは推理小説にもよく登場する。例を挙げれば、我が国でも有名なアガサ・クリステイ (Agatha Mary Clarissa Christie [1891-1976]) の『ポケットにライ麦を』 (*A Pocket Full of Rye*) や『二十四羽のクロウタドリ』 (*The Twenty-Four Blackbirds*) である。この2作品は、いずれも「マザーグース」の「6ペンスの唄を歌おう」 (“Sing a song of sixpence”) を援用したもので、彼女が大の「マザーグース」ファンであることを示すものである。でも、援用理由はそれだけではあるまい。クロウタドリが正真正銘「クロドリ」でもあるからこそ、彼女の眼鏡に合ったのである。奥田夏子氏は「Blackbird は甘い明るい声の歌い手なのに、black という色から陰鬱な不気味なイメージを生ずるのか、推理小説に登場するには効果的である」¹⁵⁾ と指摘している。

次に紹介する詩はアイルランドの詩人 A. P. グレーブズ (Alfred Perceval Graves [1846-1931]) の「クロウタドリとツグミ」であるが、ここに登場する

クロウタドリは「悪，誘惑」，「絶望，破滅，悲しみ，悲哀」を表す「クロドリ」のイメージそのものである。

‘The Blackbird and the Thrush’

One evening as I walked
Down by a green bush,
I heard two birds whistling,
’T was the blackbird and thrush ;
I asked them the reason
They were so merrie,
And in answer they sang back to me,
“We are single and free.”

Next morning as that green bush
I passed all alone,
Two thrushes piped out of it,
The blackbird was flown ;
I asked them the reason
Their hearts were so gay,
It was joyfully they answered me,
“We have mated to-day.”

One morning little after
That bush I went by,
When o’er me most piteously
I heard my thrush cry ;
I asked why such sorrow
He poured from the tree,
And he answered, “’T is the blackbird
Has my love stolen from me.”

Oh, freedom it is pleasant,

Love returned is delight !

But a lover deserted

Must mourn noon and night,
Break my house, take my goods,

I can gather fresh gain ;

But love's ruined bower

Who shall build up again ?

「或る^{わし}晩俺の行き過ぎた

緑したたる藪陰で、

二^{ひき}正の鳥が鳴いていた、

それは黒鳥と^{つぐみ}鶇だった。

どうしてそんなに嬉しいと

二正の鳥に訊ねると、

鳥は^{こた}応えてこう言うた、

〈俺等^{わしら}は^{ひとり}独身で自由です。〉

翌朝俺がただ一人

またその藪を通ったら

鶇が二正鳴いていて

黒鳥はもういなかった。

どうしてそんなに嬉しいと

二正の鳥に訊ねると、

さも嬉しげにこう言うた、

〈俺等は今日一緒になりました。〉

その後程なく或る朝に

またその藪を通ったら、

いと^{かな}哀しげに木の上で

前の鶇が啼^ないていた。
 どうしてそんなに哀しそに
 啼いていやると訊ねると、
 鶇は応えてこう言うた、〈あの黒鳥が
 妻を奪って行きました。〉

ああ、自由は確かによいけれど、
 恋をするのもよいけれど、
 見捨てられたる恋人は
 夜昼^な哭かねばならぬぞよ、
 家や道具が失せたとして
 手に入ることもまたあるが、
 壊れた恋の園亭^{あずまや}を
 ふたたび建てる人はない。』¹⁶⁾

このようにクロウタドリは、不吉な「クロドリ」の故か、負のイメージ・シンボルが付き纏うようである。とはいえ、この鳥はヨーロッパ屈指の「ウタドリ」でもある。アト・ド・フリースもクロウタドリの今一つのイメージ・シンボルとして「《紋章》その大きく澄んだ啼き声からひびきのよい家名を表す」¹⁷⁾と記している。では立場を変えて、「ウタドリ」の観点からクロウタドリの「明」について見てみよう。

3

それには博物学の観点から、鳥の声音に熟知した専門家の意見を聞くのが一番である。新・旧両大陸の鳥類に精通し、「鳥の詩人」とも称される高名な博物学者 W. H. ハドソンは、「ウタドリ」としてのクロウタドリを評して次のように言う。

The charm is chiefly due to the intrinsic beauty of the sound; it is a fluty sound and has that quality of the flute suggestive of the human voice, the voice in the case of the blackbird of an exquisitely pure and beautiful contralto. The effect is greatly increased by the manner in which the notes are emitted — trolled out leisurely, as if by a being at peace and supremely happy, and able to give the feeling its most perfect expression.

It is this delicious song of the blackbird — a voice of the loveliest quality, with an expression derived from its resemblance to a melodious, brightened human voice, uttered in a leisurely and careless manner, as of a person talking sweetly and mingling talk with snatches of song — it is all this combined which has served to make the blackbird a favourite and more to most of us as a songster than any other, not excepting the nightingale.¹⁸⁾

「クロウタドリの最大の魅力は純然たる声音の美しさにある。それはフルートのような音色であり、フルートのもつ肉声的な特質をそなえている。それも澄みきった、精緻な陰影にとんだ美しいコントラルト。その効果は彼の歌いぶりによって一層高められる。歌はらくらくと流れ出る。それはみずから平安と至福のうちにあつて、歌の心を余すところなく歌いきるもののやりかただ。

クロウタドリが万人に愛されるのは、まさにこの甘美な歌による。うっとりするような声音、音楽好きな快活な人の声を思わせるゆたかな表現力、そしてまるでだれかが美しい声で語りながら、ときどき途中で歌の断片を投げ込んでいる、といった調子の、軽やかでらくらくとした歌いぶり、こうしたすべてのことが、クロウタドリを多くの人々にとって他の鳥以上の存在にしているのだ。ここで他の鳥というなかにはナイチンゲールさえ含まれる。]¹⁹⁾

その結果、彼はクロウタドリを次のように評価している。

① If the editor of some widely circulating newspaper would put the question

to the vote, the blackbird would probably come first, in spite of the myths and traditions which have endeared certain other speeds to us from childhood.²⁰⁾

「広い読者層をもつ新聞で鳥の人気投票をしたら首位はきっとクロウタドリだろう。私たちが子供のころから種々の神話や伝説で親しんできたなじみの鳥たちでさえ、クロウタドリには一步を譲るにちがいない。」²¹⁾

② blackbird, nightingale, skylark, marsh warbler. The blackbird is first because of the beautiful quality of its voice and its *expression*, due to its human associations.²²⁾

「クロウタドリ，ナイチンゲール，ヒバリ，ヌマヨシキリをもって，私はわが国の四大歌手としたい。なかではやはりクロウタドリが音質の美しさと人間の声を思わせる〈表現〉のゆたかさで第1位だ。」²³⁾

他にもない W. H. ハドソンが《クロウタドリ＝英国第一の鳴鳥》と言うのだから，この評価は御墨付きを頂いたのも同然である。だとすると，詩人や文人がこの鳥を放って置くはずがない。具体的に見てみよう。

最初に，小説家・詩人のジョージ・メレディス (George Meredith [1828-1909]) から。詩人は「谷間の愛」(‘Love in the Valley’) の中で，クロウタドリに言及して次のように言う。

Busy in the grass the early sun of summer
Swarms, and the blackbird's mellow fluting notes
Call my darling up with round and roguish challenge :
Quaintest, richest carol of all the singing throats!²⁴⁾

(夏草の中で早朝の日の光が忙しげに溢れ
クロウタドリのフルートのような美しい鳴き声が
大きく，お茶目に響いて我が愛しき者の眠りを覚ます
あらゆる鳴き鳥の中で最も豊かな歌声だ。)

一読して自明の如く、彼もまた W. H. ハドソンと同様、クロウタドリを《あらゆる鳴き鳥の中で最高のウタドリ》と位置づけている。クロウタドリの歌声を最高に評価する文人は他にも居る。ウェールズの出身で、人生の前半を放浪に明け暮れた詩人 W. H. デーヴィス (William Henry Davies [1871-1940]) である。「超放浪生活者」として人生の辛酸を嘗めた末に、詩人は「我が鳥たち」(‘My Birds’) の中で次のように言う。

It is certainly a great comfort to sit in one’s own garden and listen to the Blackbird’s song. To me it seems to be life at its highest value, to which all other kinds of life appear dull, unhealthy, and wasteful.²⁵⁾

(我が家の庭に腰を下ろして、クロウタドリの歌声に耳を傾けると、確かに大いに心安らぐ。それは、私にとって最高に価値ある生活で、それに比べると、他のどんな生活も退屈で、不健全で、無駄のように思われる。)

クロウタドリの甘美な歌声に心の安らぎを覚えるのは、ジョン・クレアと同様である。彼は「羊飼いの暦」でクロウタドリに言及して次のように言う。

While from her cage the blackbird sings,
That on the woodbine arbour hings ;
And all with soothing joys receive
The quiet of a Summer’s eve.²⁶⁾

(スイカズラの^{あづま}東屋に吊された
鳥籠からクロウタドリが歌い
全ての者は心なごむ喜びをもって
夏の夕べの静けさを迎え入れる。)

クロウタドリが登場する有名な作品と言えば、他にウォルター・スコットの『湖上の麗人』があるが、これについては「ツグミ論文」で紹介済みなので、

ここでは割愛する。

最後に紹介したいのはドリンクウォーター (John Drinkwater [1882-1937]) の「クロウタドリ」である。訳文は新井明氏によるもので、奥田夏子・山崎喜美子・川崎晶子著『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』からの転載である。

‘Blackbird’

He comes on chosen evenings,
 My blackbird bountiful, and sings
 Over the gardens of the town
 Just at the hour the sun goes down.
 His flight across the chimneys thick,
 By some divine arithmetic,
 Comes to his customary stack,
 And couches there his plumage black,
 And there he lifts his yellow bill,
 Kindled against the sunset, till
 These suburbs are like Dymock woods
 Where music has her solitudes,
 And while he mocks the winter’s wrong
 Rapt on his pinnacle of song,
 Figured above our garden plots
 Those are celestial chimney pots.²⁷⁾

「かれは夕べを選んでやってくる、
 恵み豊けきクロウタドリ。そしてうたう、
 ちょうど日の落ちる時刻に、
 町の庭々を渡りゆきつつ。
 かれは煙突の群がるなかを、
 神の算術を頼りに
 いつもの煙突に飛びきては、

そこで漆黒の羽羽を休ませる。
 そしてそこで黄色のくちばしを上げて
 没りゆく日に身を燃やせば、やがて
 この辺りはひとり楽ねの音のみのきこゆる
 デイモック*の森のごとくなる。
 そして冬の任でかした悪事を、調べの絶頂いただき
 かれが恍惚あなどとして嘲れば、
 煙突の通風管は、菜園の上に
 姿を見せて、天上のものと化す。]²⁸⁾

*グロスターシアの森。果樹園、野生の水仙で名高い

以上、英文学でクロウタドリの登場する主な場面について紹介してきた。だが、この鳥は伝承童謡の「マザーグース」、中でも有名な「6ペンスの唄を歌おう」に登場するほど英国では人口に膾炙している有名鳥で、しかも「ヨーロッパ三鳴鳥」とか「英国第一の鳴鳥」と絶賛される別格の歌姫である。

だとすると、W.H.ハドソンの言う疑問：「英国にはいつの世にもクロウタドリがいて、ここを故郷とし、どこにでもふんだんにいたというのに、文学作品にはなぜもっととり上げられなかったのか。たしかにこの点でいうなら、クロウタドリはナイチンゲールにはるかに及ばない」²⁹⁾を抱くのは誰しも当然のことである。

この疑問に関して、当のW.H.ハドソンは「この事実は単に、彼らが昔も今も、ヨーロッパ大陸の詩人の習慣を踏襲していることを示しているにすぎないのだ」³⁰⁾と断じている。この負の要因に《クロウタドリ＝黒鳥》が有るのではあるまいか。というのも、ナイチンゲールも我が国の鳴鳥ウグイスのように、体色の実に地味な鳥なのだから。では舞台をアメリカに移して、この国の文芸に登場する **blackbird** について見てみよう。

4

blackbird の登場するアメリカの詩にウォーレス・ステイヴンズ (Wallace Stevens [1879-1955]) の「ツグミの十三態」がある。その内容は以下の如し。

‘Thirteen Ways of Looking at a Blackbird’

I

Among twenty snowy mountains,
The only moving thing
Was the eye of the blackbird.

II

I was of three minds,
Like a tree
In which there are three blackbirds.

III

The blackbird whirled in the autumn winds.
It was a small part of the pantomime.

IV

A man and a woman
Are one.
A man and a woman and a blackbird
Are one.

V

I do not know which to prefer,
The beauty of inflections
Or the beauty of innuendoes,

The blackbird whistling
Or just after.

VI

Icicles filled the long window
With barbaric glass.
The shadow of the blackbird
Crossed it, to and fro.
The mood
Traced in the shadow
An indecipherable cause.

VII

O thin men of Haddam,
Why do you imagine golden birds?
Do you not see how the blackbird
Walks around the feet
Of the women about you?

VIII

I know noble accents
And lucid, inescapable rhythms ;
But I know, too,
That the blackbird is involved
In what I know.

IX

When the blackbird flew out of sight,
It marked the edge
Of one of many circles.

X

At the sight of blackbirds
 Flying in a green light,
 Even the bawds of euphony
 Would cry out sharply.

XI

He rode over Connecticut
 In a glass coach.
 Once, a fear pierced him,
 In that he mistook
 The shadow of his equipage
 For blackbirds.

XII

The river is moving.
 The blackbird must be flying.

XIII

It was evening all afternoon.
 And it was going to snow.
 The blackbird sat
 In the cedar-limbs.³¹⁾

「 1

二十の雪山の中で、
 ただ一つ動くものといったら
 ツグミの目だけだった。

II

私は三つの心をもっていた、

三羽のツグミがとまっている
一本の木のように。

III

ツグミは秋の風にのって舞った。
それはパントマイムの小さな部分だった。

IV

一人の男と一人の女は
一つである。
一人の男と一人の女と一羽のツグミは
一つである。

V

私にはどっちをとっていいのかわからない、
声に変化する美しさか
暗示の美しさか、
囁^{さえず}っているツグミか
囁^やるのをピタリと止めた時のツグミか。

VI

つららが長い窓を
やたらとゴテゴテしたガラスで一杯にした。
ツグミの影が
それをあちこち横切った。
その感じは
わからない原因を

影の中に
写した。

VII

オーハダムの瘦せ^や男たちよ、
どうして金いろの鳥を想像するのか？
お前たちの周りにいる女たちの
足もとを歩いているツグミが
みえないのか？

VIII

私は気高い調子や
はっきりした逃れられない旋律を知っている。
しかしツグミが私の知っているもの
に含まれているということも
また知っている。

IX

ツグミが飛び去ってみえなくなった時
それは沢山^{たくさん}の円の一つの
端^{しる}を印した。

X

みどり色の光りの中を飛んでいる
一羽のツグミをみたなら
口のうまい女衛^{せげん}でも
鋭い叫び声をあげるだろう

XI

彼はコネティカットを
 ガラスの馬車にのって行った。
 一瞬恐怖が彼を襲った、
 彼は馬車全体の影を
 ツグミと
 見まちがえた。

XII

河は流れる
 ツグミは飛んでいるにちがいない。

XIII

午後はずっと夕方だった。
 雪が降っていた
 また雪が降ろうとしていた。
 ツグミはヒマラヤ杉の大枝に
 とまっていた。³²⁾

この詩に登場する **blackbird** は欧州産の「黒鳥」か、それとも米国産の「黒鳥」か。欧州産ならば、ツグミ類のクロウタドリ、北米産ならばハゴロモガラスである。というのも、「北アメリカにも **blackbird** と呼ばれる鳥がいるが、こちらの和名はハゴロモガラスであり、ムクドリモドキ科の鳥でツグミの仲間ではない、まったく別の鳥である」³³⁾ からだ。そもそも北米にはクロウタドリは生息していないのである。

でも、この詩の第5連の内容を見れば、この「黒鳥」(**blackbird**) はツグミ類のクロウタドリのようなものである。というのも、ハゴロモガラスの鳴き声は「キ

ーキー、ギャーギャーというもので……美しい歌声というのにはほど遠いものである」³⁴⁾からだ。事実、訳者もハゴロモガラスではなく、「ツグミ」と訳している。こういう齟齬が生じるのも、①英語と米語では鳥名が同じでも、鳥の種が異なる；②アメリカは元英国の植民地で、移民の国である；③詩は想像力の産物である、からである。

ちなみに全く別種の鳥であるにも拘らず、英・米での「呼び名」は同じ鳥と言えば、robin や lark がある。後者の lark は英国ではヒバリ、米国ではマキバドリを意味し、この両者は全く別種の鳥である。その具体例は、ウィラ・キャザーの作品にある。というのも、*The Song of the Lark* の lark はヒバリで、『おお、開拓者たちよ！』の冒頭に掲げられた作者自作の詩に登場する lark はマキバドリであるからだ。

ちなみにウォーレス・ステイヴンズについて、安藤一郎氏は「ステイヴンズは、フランス詩に親しみ、ヴァレリーを学んで、〈絶対詩〉とみずから言う、アメリカには珍しい、想像力の豊かな、そして言語の魔術による融通無碍の世界を創り出した」³⁵⁾と解説している。と見てくれば、米国の鳥名に関しては、一応注意を払う必要があるようである。では、新・旧両大陸で二つの顔を持つ「黒鳥」(blackbird) にまつわる、今一つの《悩ましい》例を紹介したい。

5

それは、ローラ・インガルス・ワイルダーの自伝的物語：『大草原の小さな家』である。舞台はアメリカの西部辺境；時代は英国との絆が未だ強かった西部開拓時代；主人公は開拓少女ローラ。この作品の第9章の標題は、奇しくも“Blackbirds”である。この「黒鳥」はクロウタドリか、それともハゴロモガラスか。答えは後者である。というのも、この「黒鳥」たちは米国産だからである。

「黒鳥」のハゴロモガラスは連日、大挙してローラ一家のトウモロコシ畑を襲い、甚大な被害を与える。ある日、ローラの父親は銃で打ち落とした「黒鳥」

を両手に一杯抱えて帰宅し、妻に手渡す。それをローラの母親がパイに焼いて、一家で試食する。これが第9章の内容であるが、その中に次のような場面がある。

She (Ma) opened the oven door, and took out the tin milk pan. It was full of something covered thickly over with delicately browned biscuit crust. She set it before Pa and he looked at it amazed. "Chicken pie!"

"Sing a song of sixpence—" said Ma.

Laura went on from there, and so did Carrie and Mary and even Grace.

A pocket full of rye,
Four and twenty blackbirds,
Baked in a pie!
When the pie was opened
The birds began to sing.
Was not that a dainty dish
To set before the king ?³⁶⁾

(母さんはオーブンの扉を開けて、ブリキの牛乳鍋を取り出した。鍋一杯に、何かしら、こんがりとキツネ色に焼けた外皮で全面分厚く包まれた物があった。それを母さんが父さんの前に置くと、父さんは目を丸くした。「チキン・パイだ!」

「〈6ペンスの唄を歌おう……〉」と母さんが言った。

ローラがその後を続けると、妹のキャリーに姉のメアリー、それに幼いグレースまでも続いた。

ポケット一杯のライ麦と
二十四羽の「黒鳥」で
パイを作って焼いたのさ!

そのパイ切って開いたら、
「黒鳥」たちが歌い出す。
王様にお出しするには
美味しい料理じゃなかるうか。）

言う迄もないが、主人公の母さんがオーブンで焼いた「黒鳥」は米国産のハゴロモガラスで、下の「マザーグース」に登場する「黒鳥」は欧州産のクロウタドリ。両者は全く別種の鳥である。にもかかわらず、この別種の鳥が原書の中ですんなりと連結するのは、①英・米では同一語の「黒鳥」である；②米国では英国の伝承童謡「マザーグース」が開拓時代から人口に膾炙していたからである。更に今一つ、ローラの母親は良妻賢母の典型で、結婚前の職業は教師であった点も忘れてはなるまい。

ちなみに、母さんの焼いた「黒鳥」パイの味はどうであったか。それについては、次の文を見れば明らかである：①「父さんは一口食べるなり、こう言った：〈チキンパイなど問題にならないほど美味しいよ〉」（“He ate a mouthful and said, “This beats a chicken pie all hollow.”³⁷⁾）；②「ハゴロモガラスのパイはチキンパイよりも数段美味だ、と一家全員が同意した」（“They all agreed that blackbird pie was even better than chicken pie.”³⁸⁾）

とはいえ、見た目は同色同大のハゴロモガラスがいくら上手く《変身》しても、それは見てくれのみで、一声鳴けば、正体は直ぐにばれる。ところが、見た目の変身はハゴロモガラスに一步譲るにしても、鳴き声の点では本物のクロウタドリと区別の付けがたい《声のクロウタドリ》がいる。我が国のクロツグミ（Japanese grey thrush）である。それは次の言葉：①「（クロウタドリの）声紋はクロツグミのものとはよく似ている」³⁹⁾；②「（クロウタドリは）日本人のバードウォッチャーが聞けば、まず最初にクロツグミの名前を連想するほど声がかたいへんよく似ている」⁴⁰⁾を見れば明らかである。では、クロツグミとは一体どのような鳥なのか。具体的に見てみよう。

6

最初に、この鳥の全体像について、本邦の『百科事典』は次のように述べている。

スズメ目ヒタキ科の鳥。全長約22cm，雄は体上面と胸が黒く，腹面は白地に黒斑が散在している。くちばしは黄色。雌は全体に褐色で，下面に黒斑がある。中国中部と日本で繁殖し，秋・冬季には中国南部やインドシナに渡る。日本では北海道から九州までの各地で繁殖するが，南西部では数が少ない。落葉広葉樹林からスギやマツの造林地までいろいろなタイプの林にすみ，おもに地上をピョンピョンはねながらミミズや昆虫を探し出して食べる。4～7月の繁殖期には，雄はキキコ，キキコ，ピョコピョコと聞こえるほがらかな感じの美しい声でさえずる。ただし，アカハラのようにこずえ付近ではなく，おもに中層部の枝上でさえずる。繁殖はつがいで行う。深いわん形の巣を太い枝のまた状部分につくり，3～4個の卵を産む。抱卵は雌だけが行い，育雛は雌雄ともに行う⁴¹⁾

ここで、このクロツグミの外見：「スズメ目ヒタキ科の鳥。全長約22cm，雄は体上面と胸が黒く，腹面は白地に黒斑が散在している。くちばしは黄色」と、先に見たクロウタドリの外見：「スズメ目ヒタキ科の鳥。全長約25cm，いわゆる大型ツグミ類で，雄は全体に黒く，くちばしだけが黄色い」を読み比べてみると，両者は，腹部を除けば，ちょっと見には，ほぼ同色同大の鳥と言える。和名の「黒ツグミ」が英名では「灰色ツグミ」となっているのは，雄の体上面と胸の黒色に対して腹部の白地が目立つ故に，「黒」と「白」の中間色を採って「灰色」としたのであろうか。ちなみに，クロツグミは「夏」の季語である。

次に，クロツグミの鳴き声について見てみたい。鳥類の鳴き声に精通した蒲

谷鶴彦氏は、『日本野鳥大鑑：鳴き声 333（下）スズメ目』の中で次のように述べている。

夏鳥として渡来する5月より囀り始める……山地で盛んに囀るのは5月に入ってからである。6月が特に盛んで、7月いっぱい聞くことができる。

季節はずれに囀ることは少ないが、渡りの途中のものが、都会の公園など平地で囀るのが聞かれることがある……

また、囀りには他の鳥の声を取り入れることがある……

ウグイス、オオルリ、コマドリが三鳴鳥として日本を代表する歌い手のベスト3とされているが、クロツグミのほうがはるかに素晴らしい歌い手ではないだろうか⁴²⁾

W. H. ハドソンが《クロウタドリ＝英国第一の鳴鳥》と賛美していることは既に見たが、そのクロウタドリに相当する我が国の歌姫がクロツグミだ、と言えそうである。それは、上記の言葉のみならず、次の評価：①「ヨーロッパのクロウタドリに相当するものといえば、日本ではクロツグミであろう」⁴³⁾；②「野鳥の中でも、その囀りは屈指の美しさ」⁴⁴⁾；③「日本でも指折りの鳴き鳥」⁴⁵⁾；④「その歌唱力から森のプリマドンナと呼ばれている」⁴⁶⁾等々を見れば、頷けよう。

だとすると、鳴鳥の番付表では、クロウタドリが西の横綱であるのに対して、クロツグミは東の横綱と言えそうである。では、この評価に値する厚遇をクロツグミは国文学の世界で受けているだろうか。どうも、そうではなさそうである。戦前の話とはいえ、中西悟堂氏は「これほど声の目立つクロツグミだが、俳諧歳時記にはこれまた取り上げられていない」⁴⁷⁾と嘆いている。どうも我が国の文人たちは、伝統的に、聞きなしが容易で、余韻翳々と間を置いて鳴く鳥を最良にする傾向があるようである。

それが証拠に『万葉集』に登場する鳥で見ると、最も数が多いのはホトトギス、次がウグイスである。この「ホトトギス」には同属の「カッコウ」も含まれるにしても、その歌は全部で153首もある。次に、『万葉集』と同様、『古事記』にもツグミ科の鳥は登場しているが、いずれもクロツグミではなく、トラツグミである。

ちなみに、人間の言葉に置き換えた「聞きなし」で言えば、ホトトギスは「特許許可局」、カッコウは文字通り「カッコウ」、ウグイスは「ホーホケキョ」、トラツグミは「ヒー ヒョー」と鳴く。更に言えば、ウグイス、コマドリ、オオルリは「日本三鳴鳥」であるが、コマドリは名の通り、駒が嘶くように「ヒンカララララ…」と短く囀る。オオルリのみが、やや複雑に「ピーリー、ピポヒーリー、ジジ」⁴⁸⁾と鳴く。換言すれば、オオルリ以外、上に見た鳥は全て「聞きなし」を少し学習すれば、ずぶの素人でも容易に判別することが出来る。それだけ人間に近い存在になるのも宜なるかなである。

とはいえ、クロツグミは巷間の知名度ではカッコウやウグイスに劣るにしても、「声の目立つ」知る人ぞ知る鳴鳥である。何時までも無視できる筈がない。着目する文人が出て来て当然である。それが証拠に、今やこの鳥は「俳諧歳時記」では常連である。具体的に見てみよう。

- | | |
|---------------------------------------|------------------------|
| ①「黒つぐみききとめ蕨 <small>わらび</small> 捨てて立つ」 | (水原秋桜子) ⁴⁹⁾ |
| ②「暮るるまで恋のまことを黒鶉」 | (市村究一郎) ⁵⁰⁾ |
| ③「哀話のようにくけくけくくく黒鶉」 | (小木ひろこ) ⁵¹⁾ |
| ④「黒鶉講中着きし棟に鳴く」 | (岡本まちこ) ⁵²⁾ |
| ⑤「黒鶉鳴くや黒檜 <small>くろび</small> の峰おろし」 | (黙興) ⁵³⁾ |
| ⑥「夕暮れの谷戸に飴し黒つぐみ」 | (長谷川草洲) ⁵⁴⁾ |
| ⑦「北国や雪消えやらず黒つぐみ」 | (鈴木純子) ⁵⁵⁾ |
| ⑧「黒つぐみあけほのの富士雲払ふ」 | (篠田悌二郎) ⁵⁶⁾ |

見ての通り、俳句に登場するクロツグミは、「クロドリ」よりも「ナキドリ」の方が多ようである。次に、クロツグミの登場する短歌を下に3篇紹介するが、ここでもクロツグミは「ナキドリ」として登場している。

- ①「黒^{くろつぐみ}鶺野^の辺にさへづり唐^{とうがらし}辛子 いまし花咲く君はいづこに」
(北原白秋)⁵⁷⁾
- ②「芽ぶき立つ柿の林を鳴き移る くろつぐみの声^{こゑ}^{こゑ}^{こゑ}渡るなり」
(五味保義)⁵⁸⁾
- ③「暗みゆく林の空に一つ^{ひと}ゐて 声さまよひて黒つぐみ鳴く」
(窪田空穂)⁵⁹⁾

第3に、鳥名の「クロツグミ」を表題とする詩を二つ紹介したい。最初に、尾崎喜八(1892-1974)の「黒つぐみ」から。

すべての独^{ひと}り歌ふ者のやうに、
黒つぐみよ、
お前はそのまろい豊かな歌ごゑで
世界の時のながれ 空間の一点に、
みづから静寂の橋をつくる。

持ってうまれた晴朗な音色を
深く編まれたしらべに与へて、
その波の輪をとほく柔らかにひろげながら、
お前自身は四周から懸絶^{けんぜつ}した
ひとつの精力的な中心に住むのだ。

あたかも過飽和の溶液から

析出せきしゅつされる結晶のやうに、
 ありあまる記憶から歌となって
 つぎつぎとほとぼしる声のこだまが
 けさの灰ばんだ緑の霧に響いてゐる⁽⁶⁰⁾

一読自明の如く、美声の鳴鳥としてのクロツグミを唄ったものである。次に紹介するのは、高村光太郎（1883-1956）の「クロツグミ」である。

クロツグミなにしやべる。
 畑の向うの森でいちにちなにしやべる。
 ちよびちよびちよびちよび、
 ぴいひよう、ぴいひよう、
 こつちおいで、こつちおいでこつちおいで、
 こひしいよう、こひしいよう、
 ぴい。
 おや、さうなんか、クロツグミ⁽⁶¹⁾

詩人は太平洋戦争中に数多くの戦争協力詩を作り、戦後その自責の念に駆られ、岩手県花巻西郊の山中に隠棲し、そこで7年間自炊の独居生活をする。その孤独の中で作られたのが、上の詩である。この点について詩人の伊藤信吉氏は、次のように解説している。

いかに自己流謫・自己処罰であっても、たった一人の山小屋暮らしは孤独そのものである……そういう精神的孤独の人の耳に、黒ツグミの鳴きごえがきこえる。自分がその黒ツグミなんだ。「こひしいよう、こひしいよう」は、同時に「さびしいよう、さびしいよう」に他ならなかったのである⁽⁶²⁾

ちなみに、クロツグミの鳴き声に関して、中西悟堂氏は「(ツグミ類の中で)クロツグミはいちばん鳴きごえがうるさいうえに、ほかの鳥の真似をやたらにする……ただ饒舌……コーイだの、コイコイだの、ココイー、ココイーだの……いろいろな文句をつける」⁶³⁾と述べている。

以上筆者の知る限り、我が国の文学に登場するクロツグミについて紹介してきた。でも、見ての通り俳句を除けば、その登場場面は実に少ない。どうも我が国の文壇ではクロツグミの認知度は、まだまだ十分とは言えないようだ。でも、この鳥は実力では泰西第一の鳴鳥とも言われるクロウタドリの《日本版》である。我が国が今後益々洋風化の度合いを強めるにつれて、人気も高まるのは必定。時は移り、世は変わるのである。

結 び

以上見たように、文芸に登場するクロウタドリも又その日本版であるクロツグミも「明」「暗」相反するイメージ・シンボルを有する。それというのも、両者は共に見た目には陰鬱で不吉な「クロドリ」である反面、鳴鳥としては東西の横綱とも言うべき「ウタドリ」だからであろうが、これらは何れも目と耳からの感覚的判断に基づくものでしかない。では、本当の所、クロウタドリとは、どのような「人柄」の鳥なのであろうか。W. H. ハドソンの『鳥たちをめぐる冒険』に、この鳥の「人となり」を物語る逸話がある。以下紹介する。

“The next case is from Penzance and was told to me when I was staying there. A lady of that town, a member of one of its oldest and most distinguished families, is a great bird-lover and feeds the birds during the winter on her lawn. She noticed that a blackbird and thrush always came together to the food, and then that the blackbird fed the other, picking up the morsels and placing them in its open mouth. In looking more closely it was discovered that the thrush had lost its beak; this had been cut off close to the head, probably by a steel or a sudden-death spring trap, such as the children in

Cornwall commonly use to catch or kill small birds. The bird was incapable of feeding itself.⁶⁴⁾

「次の例はペンザンスで、私が滞在中に聞いたものである。その町有数の旧家の出身の一人の婦人が、大の鳥好きで、冬の間にじゅう庭で餌をやっていた。彼女はクロウタドリとツグミがいつも一緒にやってくることに、そしてそのうち、クロウタドリのほうがツグミに餌を食べさせてやっていることに気づいた。一口分の量をくわえては開けた口に入れてやるのである。もっと注意深く観察すると、ツグミの嘴の折れているのがわかった。根もと近くからなくなっていて、恐らくはコーンウォールの子供たちが鳥捕りや鳥殺しによく使う、鉄かバネ仕掛けの罠でやられたらしかった。それでこの鳥は自分では餌が食べられないのであった⁶⁵⁾」

無情の世の中で、なんと心の温まる話であろうか。思うに、「温もり」とは天候であれ、浮き世であれ、冷たければ冷たい程、身に染みて有り難く感じるものである。寒冷地の北の国で「春告げ鳥」の到来がひとしお待たれる所以である。「春告げ鳥」とは、北国に暮らす人々の心身に「温もり」をもたらす吉鳥なのだ。それは我が国で人口に膾炙している「ウグイスの初音」という慣用語を見ても明らかである。北欧の国スウェーデンでは、このウグイスに相当する美声の「春告げ鳥」がクロウタドリであり、国を象徴する「国鳥」でもある。でもクロウタドリは、その榮譽に十二分に値する鳥である。何しろ歌声のみならず、「人柄」の点でも折り紙付きの名鳥なのだから。

日本ではウグイスが春告げ鳥とされているが、北欧ではクロウタドリが春を歌う春告げ鳥である。スウェーデンの国鳥でもあり、大都会でもさえずりを聞くことができる⁶⁶⁾

注

- 1) 研究社『新英和大辞典 第6版』
- 2) 樋口広芳「クロウタドリ」, 『世界大百科事典』(日立デジタル平凡社, CD-ROM版, 1998)。以下『世界大百科事典』からの引用は全てこの版による。
- 3) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』(大修館書店, 1982), p. 15. この点に関しては『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』76号, pp. 12-3 参照：「クロウタドリは、人間がつくった人工的環境に完全に順応することのできた代表的タイプの鳥である。この種の鳥は、元来、森林にすむ性質をもち、密生した森のなかで孤独な生活を送っていて、めったにそこから外へ出なかった。ところが文明の進歩につれて、その自然環境が少しずつ浸食され、クロウタドリもその暮らし方と食物とをだんだんと変えていかねばならなくなったのである。いまでは、大都市の公園や庭園のなかで、まったく思うままに生活しているようだ」。
- 4) ギルバート・ホワイト『セルボーンの博物誌』山内義雄訳(講談社学術文庫, 1992), p. 176.
- 5) Gilbert White, *The Natural History of Selbourne* (Arrowsmith, 1924), p. 110.
- 6) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑：鳴き声 333 (下) スズメ目』(小学館, 1996), p. 53.
- 7) *Birds of Field and Forest*, illustrated by E. Demartini and introduced by O. Štěpánek (Spring Books, 1965), p. 108.
- 8) 『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』76号(朝日新聞社, 1974), pp. 12-3.
- 9) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹, 荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛共訳(大修館書店, 1984), p. 66.
- 10) J. C. クーパー『世界シンボル辞典』岩崎宗治・鈴木繁夫共訳(三省堂, 1992), p. 30.
- 11) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』, p. 65.
- 12) J. C. クーパー『世界シンボル辞典』, p. 58.
- 13) 『夏の夜の夢』小田島雄二訳, 『シェイクスピア大全 CD-ROM版』(新潮社, 2003)。以下シェイクスピア作品の原文・日本語訳は全てこの版による。
- 14) 小田島雄志訳
- 15) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』, p. 15.
- 16) 山宮允『英詩詳釋』(吾妻書房, 1958), pp. 307-10. 本文ではブラックバードを鶉(ヒヨドリ)と訳しているが、本論では漢字の煩わしさと誤解を避けて「黒鳥」と書き改めた。
- 17) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』, p. 65.
- 18) William Henry Hudson, *Adventures among Birds* (J. M. Dent & Sons, 1951), pp. 187-8.
- 19) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』黒田晶子訳(講談社, 1977), p. 222.
- 20) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, p. 188.

- 21) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, pp. 222-3.
- 22) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, p. 204.
- 23) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, p. 241.
- 24) *The Works of George Meredith*, vol. 25 (Russel & Russel, 1968), p. 84.
- 25) 荒木源博『英文学が語る十二か月』(研究社, 昭和51), p. 53.
- 26) 'July' in 'The Shepherd's Calendar' by John Clare (Site edited by Simon Sanada Aichi University, Japan) の e-text による。
- 27) 'Blackbird' by John Drinkwater (Book Group Online, 2004) の e-text による。
- 28) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』, pp. 18-9.
- 29) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』, p. 223.
- 30) 同上
- 31) 'Thirteen Ways of Looking at a Blackbird' by Wallace Stevens (The Academy of American Poets, 1997) の e-text による。
- 32) 西脇順三郎編『青春の詩集／外国篇⑨：英米詩集』(白風社, 1966), pp. 169-71.
- 33) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑：鳴き声 333 (下) スズメ目』, p. 53.
- 34) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学：日・英・米の文学にあらわれる鳥』, p. 16.
- 35) 西脇順三郎編『青春の詩集／外国篇⑨：英米詩集』, p. 202.
- 36) Laura Ingalls Wilder, *Little Town on the Prairie* (Harper Trophy Book, 1971), p. 105.
- 37) 同上, 106.
- 38) 同上
- 39) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑：鳴き声 333 (下) スズメ目』, p. 53.
- 40) 同上
- 41) 樋口広芳「クロググミ」, 『世界大百科事典』
- 42) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑：鳴き声 333 (下) スズメ目』, p. 52.
- 43) 『朝日＝ラールス世界動物百科 (鳥類)』76号, p. 13.
- 44) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』(成美堂出版, 2005), p. 81.
- 45) 中村登流『野鳥ガイドブック：村里へ高原へ山頂へ水辺へ』(光文社, 1979), p. 116.
- 46) 山岸哲『けさの鳥』(朝日新聞社, 2004), p. 285.
- 47) 中西悟堂『定本野鳥歳時記3：鳥を語る』(春秋社, 1966), p. 45.
- 48) 志村英雄・山形則男・柚木修「バードウォッチングのための市街地・野山・水辺の鳥 186 種：野鳥ガイドブック」(永岡書店, 1989), p. 78.
- 49) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』, p. 81.
- 50) 川崎展宏・金子兜太『鳥獣虫魚歳時記 (春・夏の巻)』(朝日新聞社, 2000), p. 162.

- 51) 同上
- 52) 同上
- 53) 山本健吉『新俳句歳時記（二）夏の部』（光文社，1956），p. 44.
- 54) 長谷川草洲『鳥の俳句歳時記』（梅里書房，2003），p. 49.
- 55) 同上
- 56) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』，p. 81.
- 57) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 2：初夏の鳥』（小学館，1984），p. 131.
- 58) 同上
- 59) 同上
- 60) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥の歳時記 2：初夏の鳥』，p. 129.
- 61) 伊藤信吉編『高村光太郎詩集』（新潮文庫，2006），p. 241.
- 62) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記 2：初夏の鳥』，p. 137.
- 63) 中西悟堂『定本野鳥歳時記 3：鳥を語る』，pp. 41-2.
- 64) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, pp. 77-8.
- 65) W. H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』，pp. 104-5.
- 66) 蒲谷鶴彦『日本野鳥大鑑：鳴き声 333（下）スズメ目』，p. 53.